

43079

教科書文庫

4

810

32-1904

2000301858

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

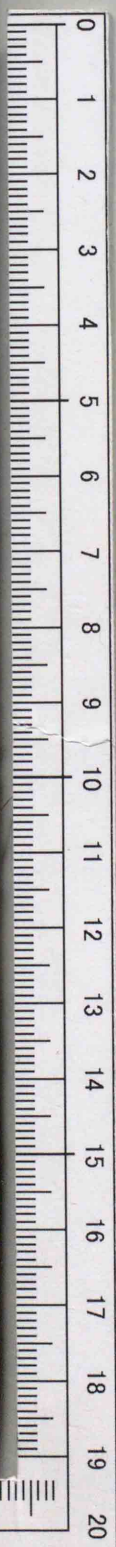
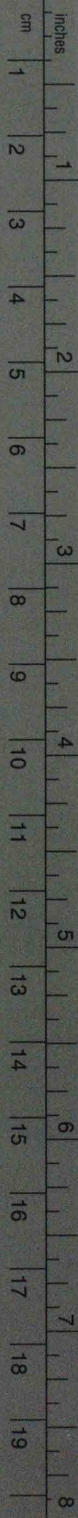


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Mo14
資料室

部省著作

高等小學讀本三

發行所 日本書籍株式會社



資料室

375.9
M014

文部省著作

高等小學讀本
三



發行所 日本書籍株式會社

目録

第一課	伊勢神宮	一
第二課	楠木正行とその母	三
第三課	蜜蜂	八
第四課	虫の農工業	十二
第五課	蠅と蜘蛛とに助けられた話	十六
第六課	昆虫の變態	十九
第七課	奈良	二十四
第八課	鳥居強右衛門	二十八
第九課	親切の報	三十一
第十課	水成岩火成岩	三十五
第十一課	がらすの製法	四十
第十二課	秀吉ノ逸事	四十二
第十三課	須磨明石	四十六
第十四課	夏の一日	四十八
第十五課	ふかに追はれた話	五十三
第十六課	動物の體色(一)	五十八
第十七課	動物の體色(二)	六十二
第十八課	虎	六十六
第十九課	風	七十
第二十課	天氣豫報と警報	七十四
第二十一課	海國男子	七十八
第二十二課	ワガ國ノ海軍	八十



授

第一課 伊勢神宮

伊勢神宮は、伊勢の國度會郡五十鈴川のほとりにあり。三種の神器の一なる八咫の御鏡を御神體として、わが國の皇祖、天照大神をまつりたてまつれる御社なり。八咫の御鏡は天照大神の皇孫瓊杵尊に、これを見ることなほ、われを見るがごとくせよ。とて、授けたまひしものなり。それより、代代の天皇は、つねに、これを宮中に置きて、尊崇したまひたりしが、崇神天皇の御代にいたり、これをけがさんことをおそれ、大和の國の笠縫邑といふ所に移したまひ、後、垂仁天皇の御代、さらに、今の

造 神殿

地に、神殿をつくりて、これに移したまひたるなり。
 神殿は、すべて、古代風の建築にして、檜の白木にて造り、
 柱は、地を深く掘りて立てたり。また、屋根は、茅にて、ふき、
 棟の両端には、千木とて、二本の木をうちちがへたるも
 のあり。この神殿は、二十年ごとに、改築せらるれども、か
 つて、そのきまを改めたることなし。
 境内には、ふるき杉の木、しんしんと、おひしげりて、知ら
 ず知らず、崇敬の心をおこさしむ。世に、西行の歌として、
 つたふるものに、

何事のおはしますかは知らねども、

かたじけなきに、涙こぼるる。

といふ歌あり。よく、そのきまをうつしたり。

伊勢神宮は、かかるたふとき御社なれば、代代の天皇の
 崇敬したまふはいふにおよばず、年年、伊勢参宮とて、各
 地より、参拜するものはなはだ、多し。

第二課 楠木正行とその母。

後醍醐天皇の延元元年に、足利尊氏は、弟の直義と、數十
 萬の大軍をひきゐて、九州から、京都の方へ、攻め上つて來
 た。天皇は、たいそし、おどろかれて、楠木正成に命じて、新
 田義貞と、これを攝津の國の兵庫で、防がしめられた。

言

正成は「今度の合戦がさいごの合戦となるかも知れない。」と思ったので、攝津の國の櫻井驛に、来た時、子の正行に、死後の事を、いろいろ、言ひふくめ、菊水の刀をわたして、故郷の河内の國に、かへらせた。その時、正行は、ぞうぞう、十一歳であった。

正成は、それから、進んで、湊川で、直義と戦つて、とーとー、討死してしまった。

尊氏は正成の首を取つて、京都の六條河原に、さらした。しかし、「あとの妻子が、さぞ、見たく、思ふであらう。」と思つて、その後、その首を正成の遺族に送り届けた。正成の妻と正

止

行とは、正成が、兵庫へ、たつ時、いろいろ、言ひ置いたこともあり、また、櫻井驛で、正行に言ひふくめたこともあるので、かねて、「かうならう。」とは、思つてゐたが、いま、まのあたり、その、かはりは、はてた首を見ては、胸もふさがり、氣も遠くなくて、しばらくは、なげきの涙を止めかねてゐた。やがて、正行は、つと、立って、流れる涙を、袖で、おきへながら、佛間の方へ、行つた。母は、ふしぎに思つて、そつと、あとをつけて、行つて見ると、正行は、櫻井驛で、父から、もらった菊水の刀をぬき、袴の腰をおしきげて、いまや、腹につきたてようとしてゐる。

母は、おどろいて、かけよって、正行まさつらの小腕こうでにとりついて、泣く泣く、いましめて、言ふには、

「梅檀せんたんは、二葉ふたばより、かうばし。」といふ諺ことわざがある。おまへは正成まさしげ殿の子ではないか。いかに、幼いといつても、このくらゐのことに、まどつて、よいものか。まゝ。よく、考へて見るがよい。櫻井さくらゐのえき驛で、父上にお別れまうしたとき、父上は、何と、おっしゃつた。たとひ、父の武運ぶえんがつきて、討死するよゝなことがあつても、一族、家來けらい、一人でも、生き残つてゐる間は、いま一度、軍をおこして、尊氏たかうぢらを亡ほろぼして、天皇陛下の御心をお安めまうせ。」と、くれぐれも、おっしゃつた

別

安

教訓

といつたではないか。その時、歸つて來て、この母に話して聞かせたものが、いつの間に、忘れてしまつたのか。そんなことでは、天皇陛下のお役に立つことはおろか、父上の忠義もむにしてしまふだらう。」
といつて、正行まさつらの手から、刀を取りあげてしまつた。正行まさつらは、そのばに、泣き倒れた。
正行まさつらは、その後は、父の遺言ゆいごん、母の教訓が、身に、しみじみと、しみわたつて、ほかの子どもと、遊ぶ時にも、尊氏たかうぢを追っかけるまねをしたり、尊氏たかうぢの首くびをとるまねをしたりして、ゆめにも、その事を忘れなかつた。

群

蜜蜂ハ群ヲナシテ野山ノ木ノウロナドニ巢ヲツクル
モノナレドモ、マタ、人ノ家ニ飼ハレテ箱樽ナドノ中ニ
モ、巢ヲ造ル。

蜜蜂、一群ノ數ハ、數千ヨリ數萬マデモアリテ、タガヒニ、
カラアハセテ、共同生活ヲイトナム。群ノ中ニハ、雌蜂、雄
蜂、働蜂ノ三種アリ。

體

雌蜂ハ、マタ、女王トモイヒテ、一群ノ中ニ、タダ、一匹アル
ノニ。體長クシテ、ハネ短ク、ツネニ、巢ノ中ニ、アリテ、卵ヲ
産ムヲツトメトス。雄蜂ハ二三百匹アリ。體、イタヅラニ、

労働

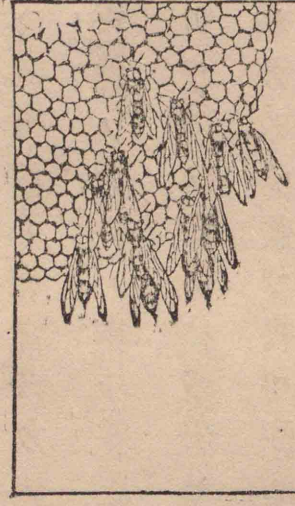
大ナルノニニテ、少シモ、労働ヲナサズ。サレバ、秋ノハジ
メニイタレバ、コトゴトク、働蜂
ノタメニ、サシコロサル。働蜂ハ



幼虫

巢ヲ造リ、食物ヲ集メ、幼虫ヲ養
フ事ナドヲツトメトス。

小室

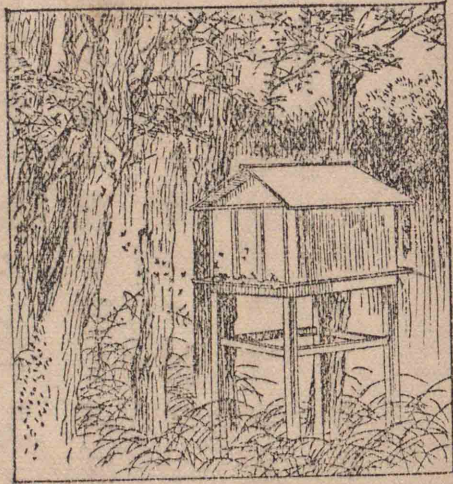


蜜蜂ノ巢ハ六角形ノ小室ノ數
限ナク、密接セルモノナリ。コレ
ハ、働蜂ガ腹ノ節ヨリ、蠟ノ薄板ヲ分泌シ、ツバニマゼツ
ツ、造レルモノナルガ、ゾノ構造ノ巧妙ナルコト、カカル

小虫ノワザトハ思ハレザルホドナリ。蜜蜂ノ巢ハ、コレヲ湯ニテ煮トカシ、サラニ精製シテ、蜜蠟トイフモノヲトル。蜜蠟ハ、膏藥、マタハ、蠟燭ヲ造ルニ用ヒラル。蜜蜂ノ食物ハ蜜ト花粉トナリ。働蜂ハ花間ヲトビマハリテ、花ノ底ノ蜜ヲ吸ヒ、口ノ奥ノ囊ニ入レテ、持チ歸ル。シカシテ、蜜ヲ吸フ間ニハ、オノヅカラ、頭、鬚、目ナドニ、花粉ノツクモノナレバ、働蜂ハ、マタ、コレヲ前肢ニテ、ハキ、後肢ノ細毛ニ集メテ、持チ歸ル。カクテ、持チ歸リタル蜜ハ、フタタビ、ハキ出シ、花粉ハ、ツバラマゼテ、塊トシテ、幼虫ト他ノ蜂トノ食料ニアテ、殘レルモノハ、コレヲ巢ノ

貯 息

中ニ貯フ。働蜂ハ、春ヨリ秋マデ、花ノアル間ハ、カク、働キ、カク、貯ヘツツ、スコシモ、怠ラザレバ、花一ツナキ冬トナリテモ、ケシテ、餓死スルガゴトキコトナシ。蜜蜂ノ蜜ハ、コレヲ精製シテ、蜂蜜トイフモノヲトル。蜂蜜ハ、食用ニモ、藥用ニモセラル。蜜蜂ハ、蜂蜜ト蜜蠟トヲランガタメニ、昔ヨリ、多ク、人ノ飼ヒタルモノナルガ、今ハ、蚕ナドト同ジク、コトニ、多ク、飼ヒテ、ホトンド、一種ノ家畜ノゴトクナレリ。



増

蜜蜂ハ、五六月ゴロニイタレバ、ソノ群ノ中ヨリ、ソノ一部ノ分ルルコトアリ。コレヲ分封トイフ。分封ハ、働蜂、雄蜂、アラタニ、生レ、マタ、女王、スナハチ、雌蜂ノ生レタル時ニ、オコルモノニシテ、モトヨリノ女王ハ新シキ女王ニ位ヲユヅリ、ミヅカラ、一部ヲヒキキテ、退去スルナリ。コノ時、新シキ箱、マタハ、樽ヲ、適當ナル所ニ、設ケ置ケバ、退去シタル一群ハ、カナラズ、ソノ中ニ入ル。サレバ、飼フモノ、少シク、注意スレバ、シダイニ、蜂ノ巢ノ數ヲ増サシメテ、マスマス、多く、蜂蜜ト蜜蠟トヲトルコトヲウルナリ。

第四課 虫の農工業

似

建

虫類の中には、工業、農業に似たる働をなすものあり。いま、これを工業者、農業者のなすわざにくらべみん。まづ、蚕は、口より、糸をはきて、繭をつくる。これは紡績の業に似たり。また、蜜蜂は、花より、蜜をとり來りて、蜂蜜をつくり、腹より、蠟を出して、巢をつくる。これは酒を造る業と、家を建つる業とに似たり。次に、蜘蛛は、しりより、糸を出して、網をはる。網をはるには、まづ、幾筋かの縦糸をかけ、次に、中より、外に向つて、圓く、あらく、横糸をかく。かくて、ふたたび、この横糸を足場として、外より、中に向つて、圓く、みつに、多くの横糸をかくる。

編物

なり。これは編物の業に似たり。

次に、蚯蚓みみずは、地中に、穴をうがちて、すみ、多量の土をのみこみて、その食用となるものをとり、残の土粉は、糞かんとして、これを、地上の穴の口に出す。かくて、数年の後には、地面に近き土をば、まったく、上下にすといふ。これは田畑を耕たがす業に似たり。

次に、蟻ありは、その種類によりて、種類の巢すをつくる。すなはち、地下に、穴をうがつものあり、穴の内部を、壁かべのごとく、かたむるものあり、小さき砂石を用ひて、石垣いしがきのごときものをつくるものあり。また、あるものは、木、草などの小

重片

實

片を、多く、積み重ね、あるものは、塔とのごとき、高さものをつくりて、木質もくしつにて、内部をかたむ。これらは土木の業に似たり。

蟻ありには、收穫しゆかく蟻ありといふ、一種の蟻ありあり。あめりかの、ある地方に、産し、ある草の實を食用とす。されば、つねに、この草の、多く、生じたる所に、すみ、その周囲しゆいの雜草ざさうをくひきりて、その成長を保護し、その實の、熟して、地に、落つるにいたりて、これを、その巢すに、運ぶといふ。これは、收穫しゆかくの業に似たり。

蟻ありは、また、ありまきを養ふ。ありまきは、植物の若芽わがめ、若葉

群

などに群り着きて、その植物の汁を吸ひ、身體より、たえず、甘き汁を出すものなれば、蟻は、この甘き汁を吸はんがために、ありまきの附着せる植物に、集りて、これを保護し、あるひは、その卵を運びて、他の植物に移して、成長せしむ。これは、牧畜の業に似たり。

第五課 蠅と蜘蛛とに助けられた話。

王子

昔、ある國に、一人の王子があつた。蠅と蜘蛛とがだいきらひで、もし、じぶんの思ふままになるものなら、蠅と蜘蛛とは、一匹も残さず、この世界から、追ひはらうてしまひたいものだ。」と思つてゐた。

烈

ある、烈しい戦争の時、王子は、敵にやぶられて、どこにかかくれねばならんばあひになつた。そこで、王子は、ある森の中に逃げこんで、大きな木のかげに、かくれてゐた。ところが、幾日もつづいた戦争の疲が出て、思はずも、うとうと、眠りだした。

眠

敵の一人がそれを見つけて、刀をぬいて、王子のそばにしのびよつた。

ちよど、その時、蠅が一匹、とんで来て、王子の顔をはひまはつた。王子は、それで、目をさました。見ると、敵が、まぢかく、寄つて、じぶんをさきうとしてゐる。王子は、おどろいて、むっ

寄

くと立ち上って、みがまへした。敵はその勢に、恐れて、逃げてしまった。

その夜、王子はその森の中にある、木のうろの中にはいて、ねた。ところが、夜のうちに、蜘蛛が、そのうろの口いっばいに、巣をかけた。

夜明ごろ、敵がふたり、王子をさがしに、来て、その木のそばを通りかかったが、一人がそのうろを見つけて、

「見よ。ここに、大きなうろがある。王子はひょとしたら、この中にかくれてゐるかも知れんぞ。」
といった。すると、ほかの一人が

破

「なに、かくれてゐるものか。見よ。このとほり、蜘蛛が、きれいに、巣をかけてゐるではないか。王子がかくれたのなら、この巣の破れてゐないはずはない。」

といった。二人は笑ひながら、先の方へ、いそいで行った。

二人の影が見えなくなった。じぶんに、王子は、うろの中から、出て来て、ほっと息をついた。そして、一度ならず、二度までも、危い命の助かったのを喜んだ。また、その助かったのが、そろひもそろって、じぶんのだいきらひな蠅と蜘蛛とのおかげであつたのを、いかに、ふしぎに思った。

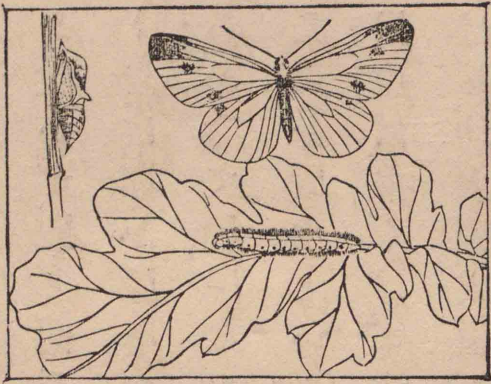
第六課 昆虫の變態

飛

昆虫といふのは足の六本ある虫類のことである。昆虫は、多くは、はねがあつて、空中を飛ぶことができる。空中を飛ぶ動物の中で、鳥類とかうもりとをのけると、あとは、みな、昆虫である。

昆虫の中には、ちよーちよのよーに、おもしろさうに、まひをまふものもあり、松虫や鈴虫のよーに、よい聲で、なくものもあり、蚕のよーに、美しい繭をつくるものも、蜜蜂のよーに、甘い蜜をこしらへるものもあるが、また、蚊やのみのよーに、動物の血を吸ふものも、いなご、うんか、ばったなどのよーに、農作物を荒すものもある。

緑



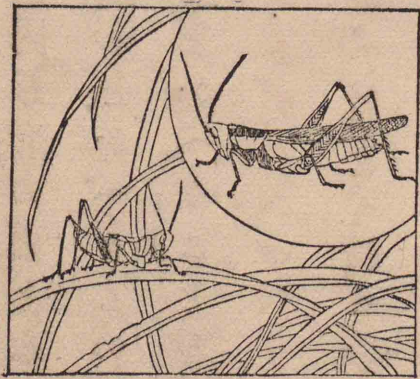
すべて、昆虫は、みな、卵から、かへつて、親と同じ形の虫となるのであるが、多くは、その間に、二三度、形をかへるものである。昆虫の變態といふのは、この形をかへることをいふのである。

たとへていへば、白いちよーちよは、その卵がかへると、まづ、いもむしのよーな形の、緑色の虫になる。この虫は、きかんに、大根などの葉をくひ、たびたび、皮を脱いで、だんだん、大きくなる。そして、じぶん、大きくなると、くふことをやめて、また、

脱

形をかへて、蛹さなぎになる。この蛹さなぎは、しばらく、たつと、また、皮を脱いで、親と同じ形の、白いちゅーちゅになる。この、白いちゅーちゅは、卵を産みつけて、死んでしまふ。學問上では、卵から、かへって、蛹さなぎになるまでを幼虫といひ、親と同じ形になったのを成虫といふ。

昆虫こんちゅうは、多くは、この變態へんたいの順序、すなはち、幼虫、蛹さなぎ、成虫といふ、三つの順序をへるものであるが、中には、この區別の、よく、わからないものもある。たとへていへば、いなごは、その卵がか



特別

へると、ほとんど、成虫と同じ形の幼虫になる。ただ、頭が、わりあひに、大きくて、はねが見えないくらい、小さいだけである。

このいなごのよーなものは特別であるが、たいていのものは、その幼虫である時と、成虫になった時とでは、その形が、まるで、違つてゐるので、ちよつと、みたところでは、全まったく、別な種類の虫であるよーに思はれる。たとへていへば、いもむしや、けむしは、ちゅーちゅや、蛾がの幼虫で、ぼうふりむしは、蚊かの幼虫、たいこむしは、とんぼの幼虫であるが、どうして、それが、それぞれ、同じ虫であると思はれようか。

第七課 奈良

皇居

都

寺

奈良は奈良朝七代、七十餘年の間、御代代の都のありし所なり。その當時は、皇居をはじめとして、神社、佛閣、所所に立ちて、はなはだ盛なりしが、桓武天皇の都を山城の國に移したまひしより、しだいに、さびれゆきて、つひには、都の跡も田畑とかはるにいたれり。

されど、その當時の春日神社、東大寺、興福寺などのごとき、大いなる社寺は、その後も、なほ、盛にして、今の奈良市の基をなすにいたれり。

春日神社は、奈良市の東にある春日山の麓にあり。境内

壯麗

歴史
参考

には、ふるき杉の木、晝も暗きばかりに、おひしげりて、多くの鹿、その間に、群れ遊べり。社殿は、壯麗にして、その廻廊には、無数の金燈籠をつりたり。また、社前路傍などには、石燈籠、きはめて、多し。

東大寺は、春日神社の西北にあり。東大寺には、大佛殿あり。かの、有名なる大佛は、このうちに、すゑ置かれたり。また、正倉院といふ庫あり。聖武天皇の御遺物などを、多く、藏して、美術、歴史の参考となるべきものすくなからず。

東大寺の東には、嫩草山あり。全山芝生にて、はなはだ、美し。

景色

興福寺は、東大寺の西南にあり。興福寺には、南圓堂、北圓堂、五重塔などありて、みな世に聞えたり。興福寺の南に、猿澤池あり。水清くして、鯉、亀など、多くすみ、岸の柳、水にうつりて、景色畫のごとし。

その他、都の跡には、西大寺、薬師寺、唐招提寺などあり。奈良市の西南、三里ばかりの所には、法隆寺ありて、みな名高し。

中にも、法隆寺は、聖徳太子の創立したまひたるものにして、その金堂、講堂、五重塔などは、およそ、一千二百年前のものなりといふ。太子の御遺物、そのころの佛像など、

傳

今、なほ、多く、傳はれり。

花のごとくに、榮えたる

奈良の都の面影を、

千歳の後に、なほ、残す

名所、舊蹟數多き

中にも、名高き東大寺。

寺にまつれる大佛の、

その建立は聖武帝。

五丈三尺五寸ある

像をすゑたる佛殿の

いらか、雲井に、そびえたり。」

第八課 鳥居強右衛門

鳥居強右衛門ハ奥平信昌ノケライナリ。カツテ、信昌ニ
從ヒテ、長篠城ニ居タリシトキ、武田勝頼大軍ヲヒキ斗
來リテ、コレヲ圍ミタリ。城兵、力ヲツクシテ、防ギ戰ヘド
モ、兵糧、シダイニ乏シクナリテ、今ハ、ホトンド、ササヘガ
タキニイタレリ。

アル日、信昌ケライヲ集メテ、敵軍ワガ城ヲ十重ニ圍ミ
テ、蟻ノ通ハンスキダニ見エズ。ワガ兵糧ハ、スデニ、ホト
ンド、ツキタリ。ワレラハ水ノタエントスル池ノ魚ニコ

城圍

謹

到

トナラズ。コノウヘハ、濱松ニオハスル徳川家康公ノ力
ヲ借りテ、敵ヲ退クルヨリホカニ、手段ナシ。コレヨリ、城
ヲ出デテ、濱松ニ行キ、公ニマミエテ、使ノヤクメヲ果ス
モノハナキカ。トイヘリ。ケライ、ミナ、目ヲ見合セテ、答フ
ルモノナシ。コノトキ、強右衛門進ミ出デテ、カカル時ニ
ハ、命モ惜ムベキニアラズ。ワレ、謹ンデ、ソノ使トナラン。」
トイヒタリ。信昌喜ビテ、使ヲ強右衛門ニ命ジタリ。

強右衛門、夜、城ヨリ、出デ、川底ヲクグリテ、ヒソカニ、敵陣
ノ間ヲスギ、ハセテ、濱松ニ到リ、家康ニマミエテ、クハシ
ク、ソノシダイヲノベテ、救ヲ乞ヒタリ。家康、コレヲ聞キ

捕 暇

テ、ソノ乞^コヲ許シ、明日軍ヲヒキキテ、出發スベシ。ナンヂ
 モトドマリテ、トモニ、行クベシ。トイヒタリ。サレド、強右
 衛門ハ「スコシモ、早く、歸リテ、ミカタニ知ラセン。」ト思ヒ
 テ、タダチニ、ヒキカヘシタリ。
 カクテ、夜、シノビテ、城ニ入ラントシタルニ、不幸ニシテ、
 敵ニ見出サレテ、捕ヘラレタリ。敵將、勝頼^{カツヨリ}、強右衛門ニ向
 ヒテ、「ワレ、ナンヂニ重キ賞ヲ與フベケレバ、明日、城際ニ、
 行キテ、家康公ハ、目下、多事ニシテ、助クル暇ナシトイハ
 レタリ。」トイヘ。シカラズバ、タダチニ、ナンヂヲ烹殺^{ニコロ}サン。
 トイヒタリ。強右衛門、イツハリテ、コレヲ諾^{ダク}セリ。

翌

翌日、壯士、十餘人、白刃^{ハクジン}ヲ提^{ヒキサ}ゲテ、強右衛門ヲ、城際ニ、ツレ
 行キタリ。強右衛門、城ヲアフギ、大聲ヲ出シテ、諸君、ウレ
 フルコトナカレ。家康公、スデニ、大軍ヲヒキキテ、出發セ
 ラレタリ。敵ヲウチヤブリテ、退ケラルルコト、カナラズ、
 二三日ノウチニ、アラン。トイヘリ。イヒラハリテ、ツヒニ、
 敵ニササレテ、死セリ。

第九課 親切の報

あめりかの、ある山の中を通してをる鐵道線路から、すこ
 し、はなれた所に、みすばらしい小屋をたてて、娘ひとり
 と、かつかつ、この世を送ってをるやもめがありました。べ

娘

職業

つに、これといふ職業もないので、にほとり鶏を飼ったり、たきぎ薪をとったりして、それを、近くの町に、賣りに、出て、わづかに、くらしをたててをりました。

ある年の春、山の雪がとけて、その水が、いちじに、おし出して、やもめの小屋のそばの谷に架けてある、鐵道の橋をおし流してしまひました。けれども、それは夜中のこととて、そのうへに、雨が、ひどく、降つてをったので、そのことを知つてをるものは、この親子のほかには、誰もありません。あゝ。いまにも、汽車が來たら、車も、人も、みな、谷に、落ちてしまふであります。

線路

この時、その親子は「何とかして、その橋の落ちたことを知らせたい。」と思つて、いろいろと、そのてだてを考へたすゑに、やゝと思ひついたのは、たきぎ薪を、鐵道線路の上に、積み重ねて、それをたくこととてありました。そこで、ふたりは、さゝそく、たきぎ薪を運んできて、それに火をつけました。

まもなく、ごーごーと、音がして、かんし機關車のあかりが見えはじめました。しかし、まだ、かんし機關手がその火を見つけないのか、汽車は、たいそ、早く、來ます。そこで、母親は、じぶんの着てをる着物をさいいて、さき竿のさきに結びつけ、それに火をつけて、高く、さしあげながら、線路の上をかけまは

結

乗客

りました。娘も、これにならって、木の枝に火をつけて、高く、さしあげながら、かけまはりました。けれども、まだ、きづかはないので、「車をとめよ。車をとめよ。」と、聲のつづくだけ、さけびました。

すると、機關手は見なれん火を見つけ、人のさけぶ聲をも聞きつけて、「何か、かはった事でもできたのか。」と思つて、すぐ、汽車をとめようと思つましたが、きーには、とまらないで、親子のをる所で、やっ、とまりました。車掌や機關手や乗客などは、みな、汽車から、下りて、そのわけをたづねました。親子は、じぶんたちの力で、人人の命を救ふことが

贈

皮

できたのを喜んで、人人を、谷の所に、つれていって、見せました。人人はこんなことがあらうとは、夢にも、思ひませんでしたので、「われわれは、まったく、この親子に助けられたのだ。この親子はわれわれの命の親だ。」といつて、あつく、礼をのべ、金を出しあつて、この親子に贈りました。鐵道會社でも、そのお礼として、金を、たくさん、贈りました。そのおかげで、親子は、いっしょ、らくに、くらしたと、いふことでもあります。

第十課 水成岩、火成岩。

われわれの、ふだん、歩いてゐる所は、地球の外皮である。

柔 岩

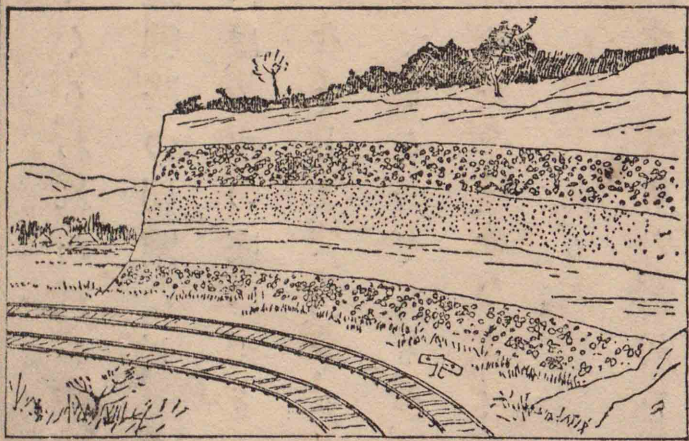
この外皮は、ちよど、卵の殻からのよーに、内にある、いろいろなものなを包んでゐるから、これを地殻ちかくといふ。地殻ちかくは、いろいろなものなのから、できてゐて、柔い土もあり、ばらばらした砂もあり、堅い岩もある。しかし、學問上では、すべて、これらを岩石がんせきといふ。

岩石は、これを、そのなりたちから、水成岩と火成岩との二つに分ける。

水成岩といふのは、水の力で、水の底にできた岩のことである。いったい、岩石は、暑き、寒きなどのかげんで、だんだん、脆もろくなり、雨水などのために、しだいに、こはれていく

河 打

ものである。この、こはれた岩石は、河の中に流れこんで、河水に打たれたり、たがひに、すれあたりして、だんだんと、かどのとれた、圓い石になり、また、ばらばらした、こまかい砂や、どろどろした、いっそー、こまかな泥土どととなって、水の勢ののろい所に、来て、水の底に沈んでしまふ。かういふことが度たびかさなると、とーとー、水の底に、板を、幾枚も、



切割

積み重ねたよーな地層ができてくる。われわれが汽車に乗って、旅行する時、をりをり、鐵道線路の切割などで、この地層を見ることがあるが、これは、昔、水の底にできた地層が、何かの地變によつて、陸地になつてしまつたのである。さて、地層は、前にいつたよーにして、できるのであるが、この地層の下部は、上部の、強い壓力のために、かたまって、かたい岩になる。これが、すなはち、水成岩である。石盤、硯砥石などに用ひる粘板岩、建築用にする凝灰岩、石灰をこしらへる石灰岩などは、みな、この水成岩である。

次に、火成岩といふのは、地球の内部から、ふきだす、あつ

熱

鑛物

い汁がかたまつて、できた岩のことである。いつたい、地球の内部には、地熱といふ、非常に、高い熱があるから、すべての物がとけてゐるべきはずであるが、上部の、強い壓力のために、とけずにゐる。これが、地殻に、すきまがあると、たちまち、とけて、あついで汁になつて、ふきだしてくる。その汁は、地中で、または、ふきだしたうへで、冷えて、かたまって、岩になる。これらが、すなはち、火成岩である。建築用にする花崗岩、安山岩などは、みな、この火成岩である。

すべて、岩石は、どれでも、一つの鑛物から、できてゐるのではなくて、たいてい、二種、三種、または、十數種の鑛物か

ら、できてゐる。花崗岩かこうがんの中には、黒い所と、白い所と、白く
 て光る所とがある。この黒い所は雲母きんぼ、白い所は長石ちうせき、白
 くて光る所は石英せきえいといふ、めいめい、一つの鑛物である。
 そのうち、長石ちうせきと石英せきえいとは、他の岩石にも、たくきん、はい
 てるものであつて、長石ちうせきは、燒物をこしらへる時、石英せきえいは、
 がらすをこしらへる時に、ぜひ、なくてはならんもので
 ある。

第十一課 がらすの製法。

がらすの用は、はなはだ、廣し。見よ。らんぶ、藥瓶りやくびん、皿さら、こぶ、鏡かがみ、
 電氣燈でんきとうのほや、窓の板がらすなどの類より、顯微鏡けんびきう、望遠ぼうえん

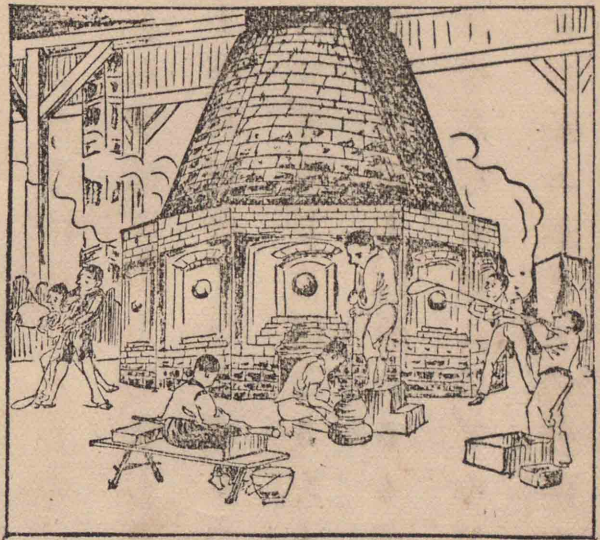
瓶

進樂

鏡きやう、種種の眼鏡めがねのれんず、寫真器械しやしんきかいに用ふるれんずなど
 にいたるまで、みな、がらすにて、造りたるものならずや。
 じつに、がらすは人間快樂の父、學問進歩の母ともいふ
 べきなり。

がらすは、ふつーに、まじりものなき石英せきえいの砂に炭酸たんさんそ
 ーだ、石灰などをまぜ、るつぽに入れて、強く、熱し、そのと
 けて、どろどろになりたる時、これを種種の形に造り、し
 だいに、冷し固めたるものなり。すなはち、らんぶなどの
 ほや、瓶などは、この、どろどろになりたる汁を、がらす、ま
 たは、鐵の、長き管くだの先につけて、しゃぼん玉を吹くがごと

皿



なり。

がらすは、前にのべたる石灰の代に、みつだそーといふものをまぜて、造ることあり。顕微鏡、望遠鏡などのれん

くに、吹きのはし、これを型に入れて、形を正したるものなり。また、板がらすは、かく、吹きのはしたるものを切りひろげて、造りたるものにて、皿、こぶなどは、かの汁を、ただちに、鑄型に入れて、造りたるもの

代

輸入

ずは、みな、この種のがらすにて、造りたるものなり。この種のがらすは、光強くして、はなはだ、美麗なれば、また、種の裝飾品を造るに用ひらる。

がらすの精良なるものは、いまだ、わが國にては、多く、造られずして、おほむね、外國より、輸入せり。くちをしきことならずや。

第十二課 秀吉ノ逸事

山城ノ國ニ、内山里トイフ所アリ。秀吉コレヲ梅松トイフモノニ預ケタリ。アルトキ、コノ内山里ニ松ヲ植エシメタルニ、ホドナク、松輩生ヒタリ。トテ、奉リタリ。秀吉笑

生

左右

參詣

ヒテ、「ワガ威光、マコトニ、サモアラン。」ト言ヒタリ。シカル
 ニ、ソノ後モ、ナホ、シバシバ、奉リタリ。コレハ、内山里ニ、生
 ヒタルニハアラズシテ、ジツハ、他所ヨリ、モトメテ、奉リ
 タルナリ。秀吉左右ノモノニ向ヒテ、「松蕈ヲ奉ルコトハ、
 モハヤ、ヤメサセヨ。アマリ、生ヒスグルゾ。」ト言ヒタリ。
 秀吉アル日、高野山ニ、參詣シタリ。コノトキ、割粥ヲスス
 メヨ。「ト言ヒケレバ、シバラクシテ、料理人、コレヲトトノ
 ヘテ、奉リタリ。秀吉大イニ喜ビテ、「高野山ハ白ナキ所ナ
 ルニ、ワガ割粥ヲ食ハンコトヲ知リテ、持チ來リタルコ
 ソ感心ナレ。」ト言ヒタリ。コレモ、ジツハ、持チ來リタルニ

多

怒

座

ハアラズシテ、ニハカニ、多人數ニテ、俎板ノ上ニテ、キザ
 ミテ、割粥トナシタルナリ。後ニ、左右ノモノ、話ノツイデ
 ニ、カク、申シケレバ、秀吉大イニ怒リテ、「無ケレバ、ナシ。」ト
 言ヒテ、事スムベシ。何ユエニ、サルコトハセシゾ。ワガ力
 ニテハ、一粒ヅツ、ケヅリテ、食フモ、心ノママナレドモ、サ
 ヨーニ、奢リタルコトハセヌモノゾ。「ト言ヒタリ。
 秀吉アルトキ、山城ノ國ノ伏見ニ、居タリ。アル日、鐵砲ヲ、
 四五十、放ツ音ノシケレバ、座ニアルモノ、ミナ、イカガシ
 タル鐵砲ノ音ニカ。「トアヤシミキタリ。シカルニ、秀吉ハ
 「カハリタルコトニハ、アラジ。大名ドモガ、鳥ナド打チニ、

出デテノ歸三チニテ、コメタル丸ヲウチヌクモノナラ
 シ。下言ヒテ、笑ヒキタリ。カクテ、見ニ、ツカハシタルニ、ハ
 タシテ、秀吉ノ言ヒタルゴトクナリキ。ソノ大名ドモハ、
 「罰セラルルコトモヤアラン。下、キミワルク、思ヒテ、數日
 スギテ、秀吉ノ城ニ伺ヒタルニ、秀吉笑ヒテ、「先日ノ遊オ
 モシロカリキヤ。」トテ、スコシモ、心ニカケザル有様ナリ
 キトゾ。

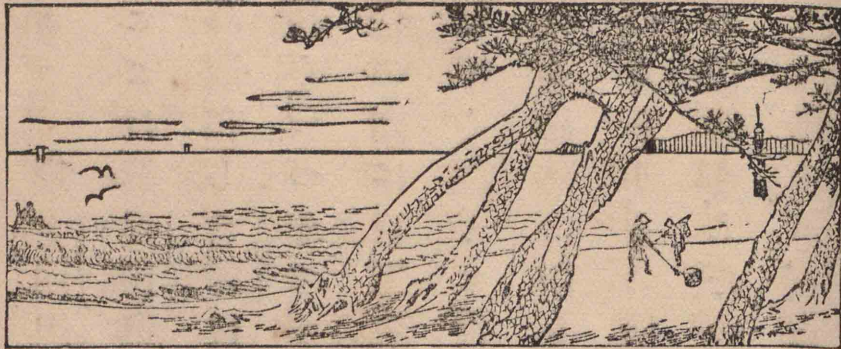
第十三課 須磨明石

松は緑に、砂白く、

風景すぐるる須磨の浦。

浦

拾音



磯邊に出でて、貝拾ふ

子どももながめの一つなり。」

帆かけて、出づる舟多く、

朝海にぎはふ明石瀉。

明石の城も、人麻呂の

社も、木の間に見ゆるなり。」

海のあなたに、いと近く、

見ゆる陸地は淡路島。

通ふ汽船の笛の音も、

涼しく、波に、ひびくなり。」

第十四課 夏の一日。

ここは、瀬戸内海のある入海なり。海面には、あまたの小島散在して、波はなはだ、おだやかに、海岸には、白き砂地長く、つづきて、すがたおもしろき松、多く、立ちならべり。松の間には、二三の漁家も見ゆ。

朝、早く、起きて、沖の方を見渡せば、なかば、もやにかくれたる島島の間を、多くの漁船の、艦の音勇ましく、こぎ出づるあり。その様、木の葉の風に、散るがごとし。やがて、その漁船も、しだいに、遠ざかり行けば、かなたの島かげより、太陽の、と、あらはれて、海は、たちまち、金の波をただよ

漁家
起
散

引
泳

はす。また、かなたの岸には、いつの間にか、一群の漁夫、出で来て、網を引けるも見ゆ。

太陽、やうやく、高くなり行けば、おとな、子どもなど、あまた、來り集りて、着物脱ぎては、海に入る。中にも、泳をよくするものは、せおよぎ、立泳、ぬきでなど、思ひ思ひに、遊びて、その様、さも、おもしろげなり。また、かなたには、つばひろの麥藁帽子かぶりたる人の、岩に腰かけて、魚つれるもあり。かなたには、日傘さしたる少女の、濱をつたひて、貝拾へるもあり。

太陽、やうやく、かたむきて、夕方近くなれば、泳ぎぬたる

濱

人人は、みな、歸り去りて、あとには、老いたる漁夫のほし
たる網あみなどとりかたづくるを見るのみ。されど、沖の方
より、三つ、四つ、二つ、歸り來る漁船見えそむれば、松の木
の間の漁家より、女、子どもなど、あまた、出で來て、濱、ふた
たび、にぎはふ。やがて、かの漁船、岸に着けば、乗りたる漁
夫、濱に、とびおり、待ちゐたる人人とともに、おのおの、大
いなる籠かごに漁船の魚を取り入れて、喜びさわぎながら、
になひ行く。

かくて、海岸、まったく、しづまりゆけば、ごなた、かなたの漁
家の窓よりは、燈ともの光見え、沖の小島の松の上には、満月まんげつ

の影涼し。

暑中
休暇

拜啓。暑中休暇となつてから、暑さが、とりわ
け、きびしうございますが、御きはりはあ
りませんか。御たづね申し上げます。私は、
一週間ほど前から、兄といっしょに、ここに、ま
ゐつてゐます。

ここは、きびしい漁村ですが、海岸のなが
めもよく、氣候の變化へんかも少くて、まことに、
よい所です。とりわけ、海は遠淺で、波は靜しづか
で、底はこまかい砂ですから、海水浴をす

理科 水泳

るには、しごく、適當な所です。それです。から、このごろは、諸方から、來て、海水浴をするものが多い。なかなか、にぎやかです。私も、日日、兄と、海に出て、小板にすがりながら、水泳をけんし。したり、魚や貝などを捕って、實物について、兄から、理科の話を聞いたりして、楽しく、日を送つてゐます。ただ、君がゐたらと、そればかり、残念に思つてゐます。

まづは、暑中御みまひかたがた、御たより

匆匆

申し上げます。なほ、くはしい事は、近日、歸宅のうへ、御話申しませう。また、日記は、御約束どほり、御めにかけるつもりで、毎日、怠らず、つけてゐます。匆匆。

八月二十日

三浦 勉

山中孝吉君

第十五課 ふかに追はれた話

ある年の夏、汽船が、大西洋海岸のある港に、とまつてゐた。その日は、たいそ、暑い日で、乗組の人人は、「どうして、しのいだら、よからうか。」と、苦んでゐた。

晝すぎになって、船長は「泳ぎたいものは泳いでもよい。」といふゆるしを出した。人人は、たいそ、喜んで、着物を脱いで、ぎんぶぎんぶと、海にとびこんだ。そして、いろいろな泳方をしてゐるのが、いかにも、おもしろきうである。中にも、ことに、おもしろきうなのは、まだ、年のいかん二人の子どもで、きゅきゅと、笑って、しきりに、うきをめあてに、泳ぎくらをしてゐる。その子どもの一人は、この汽船の大砲掛がかりの子である。

大砲掛がかりの子は、はじめには、ずっと、相手あひてをぬいてゐたが、うきから三十間ばかりの所で、きゅーに、相手あひてにぬかれてし

勵

まった。相手あひては、おほかた、勝をえようとしてゐる。

大砲掛がかりは、これまで、にこにことして、二人の様子を見てゐたが、今、じぶんの子の負けきうになつたのを見て、「おい。どうしたのだ。負けるな。負けるな。」といって、しきりに、勵ましてゐる。

ちよど、そのとき、「ふかだ。ふかだ。」といふ、恐ろしい聲が聞えた。すぐ、近所で、泳いでゐる人人は、あわてて、みな、汽船に、泳ぎもどつた。子どもらは、まだ、なにも知らずに、泳いでゐる。

四五町むかふに、せなかだけ見せて、泳いで來るのは、な

叫

るほど、見るも恐ろしい、大きなふかである。ふかは、だんだんと、子どもに近づいて来る。

大砲掛は、氣が氣でない。ただ、こんかぎりの聲を出して、「むきをかへよ。むきをかへよ。」と叫んでゐる。しかし、その聲も、子どもらの耳にははいらんのか、まだ、ききききと、笑つて、泳いでゐる。

助のぼーとはおろされた。しかし、とても、まにあひさうにもない。ふかは、いよいよ、子どもに、せまった。子どもは、はじめて、それを知つて、逃げようとしてゐるが、とても、にげおほされさうにもない。

側 撃

あー。このとき、大砲掛の心は、どんなであつたであらうか。大砲掛は、ふつと思ひついて、大砲の側に寄つた。そして、いそいで、丸をこめて、きつと、ねらひをつけた。いふまでもなく、ふかを撃たうとしてゐるのである。しかし、丸が、子どもにあたるよーなことはあるまいか。

助のぼーとは、まだ、よほど、遠い。ふかの口は、もう、子どもにつきさうである。

「あつ」と、みんなが叫んだとたん、ずどーんと、一發、すさまじい音がした。

大砲掛は、すぐ、手で、顔をかくした。人人も、みな、息をつま

らせた。

しばらくの間、海は煙におほはれた。しかし、その煙の消えるにつれて、まづ、目にはいったのは、あの、恐ろしい、大きなふかの死骸しがいであった。

喜の聲は、どっと、一度に、あげられた。

子どもは、助のぼーとに、乗せられて、歸かへつて来る。大砲がかり掛は、大砲にもたれて、無言で、それを見つめてゐる。

第十六課 動物の體色たいしき (一)

すべて、動物は、どんな動物でも、たやすく、他の動物におそはれないために、また、たやすく、他の動物をおそふこ

都合

色

大根

暮

とのできるために、それぞれ、都合のよい用意のそなはつてゐるものであるが、なかでも、都合のよいと思はれるのは、その體色についての用意である。

動物の體色は、たいてい、その住んでゐる周圍どろいの色に似てゐるものである。たとへていへば、田の中かへにゐる蛙は、土色で、木の葉の上かへにゐるあまがへるは、緑色であり、菜の花にとまるちよーちよは、黄色で、大根の花にとまるちよーちよは、白色である。

また、日中、暗い所かへに、かくれてゐて、日暮から、食をもとめに出る鼠ねずみ蝙蝠かろうなどは、いったいに、黒ずんだ色で、海の底の

砂の上にすんでゐるひらめ、かれひなどは、そのかたか
はの色が、砂の色に似てゐる。

このよゝに、動物の體色が、そのすんでゐる周圍の色に
似てゐるので、しぜん、その周圍のものともまぎれて、たゞ
すく、他の動物にみつげられるよゝなことがない。した
がつて、他の動物におそはれることも少く、また、他の動物
をおそふこともできるのである。

さて、この類の體色を、學問上では、保護色といふのであ
るが、なかには、周圍の色のかはるにしたがつて、この保護
色のかはるものさへある。たとへていへば、北國にすむ

周圍

野兎のうさぎは、ふだんは、茶褐色ちかであるが、雪の降るころになる
と、白色にかはり、いかは、水中に浮いてゐるうちは、水色
であるが、岩などにくつくと、岩に似た色にかはる。



このほか、あふりか地方に産する
かめれおんといふ動物も、また、保
護色のかはる動物である。かめれ
おんは、とかげの一種で、ふつゝに、
木の上などにすんで、蠅はなどを捕
へて、食物としてゐるのであるが、
その體色が周圍の色のかはるに

したがって、眞黒にも、緑にも、金色にも、自由にかはるといふことである。

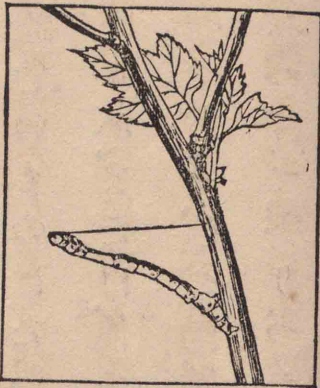
第十七課 動物の體色 (二)

さて、前にのべた保護色のかはるといふのは、ずいぶん都合のよい用意であるが、これよりも、なほ、いっそも、都合のよいと思はれることがある。それは、ただ、保護色ばかりではなく、その動物のみぶりによって、形までも、その周囲のものに似ることである。

桑 害

たとへていへば、桑の木を害するえだしぐとりは、その體色が桑の木に似てゐるばかりでなく、また、圖のよ

裏 表



ーに、體の後端を桑の木につけ、ななめに體をつき出して、休んでゐると、まるで、桑の木の小枝のよーに見える。ある地方では、このえだしぐとり

のことをどびんわりともいつてゐるが、それは、農夫などが、ときどき、これを小枝とまちがへて、土瓶をかけて、わることがあるからだといふことである。また、沖繩などに産するこのはちーは、そのはねの表には、美しい彩色があるが、裏は、枯葉によく似てゐるので、それが、次の圖のよーには、ねをとちて、木の枝などに、と

で、他の動物は、たやすく、これをみつけて、寄りつかない
よーにする。

この類の體色を、學問上では、警戒色といふのである。

第十八課 虎

尾

虎ハ、インドニ、モットモ多ク、スメル猛獸ニシテ、身ノ長サ
ハ五尺ばかり、尾ハ三尺ばかりアリ。ソノ形ハ、ホトンド、
猫ニコトナルコトナシ。

虎ノ毛色ハ、オホムネ、光澤アル黄色ニシテ、横ニ、多クノ、
太キ黒線アリ。サレバ、ハナハダ鮮明ニシテ、ヨーイニ、認
メウベキガゴトクナレドモ、虎ハ、多ク、竹林ノ中ニスム

牙 適



モノナレバ、コノ黒線、アタカモ、竹
ノ影ノゴトク見エテ、ヨーイニ、ソ
ノ所在ヲ認メガタシトイフ。
虎ノ頭ハ、短クシテ、圓シ。コレ、顎短
クシテ、ソノ顎ヲ動かス筋肉ノ太
キガタメナリ。スベテ、カカルモノ
ハ、猛獸ニ多クシテ、強キカラ出シ
テ、物ヲカムニ適セリ。

虎ノ顎ニハ、上下トモニ、左右ニ、一本ヅツ、太キ牙アリ。ソ
ノ牙ハスルドク、ヤヤ、カギノゴトク、曲リテ、動物ノ肉ヲ

舌

サクニ適セリ。マタ、舌ニハ、猫ノゴトク、ザラザラシタル、
コマカキ突起アリ。コノ突起ハ、ミナ、後ニ向キテ、骨ニツ
キタル肉ヲナメトルニ適セリ。

爪

マタ、虎ノ足ニハ、猫ノ足ノゴトク、裏ニ、柔キ肉アリ、先ニ、
隠顯自在ナルスルドキ爪アリテ、他ノ動物ニシノビ寄
リ、コレヲ捕フルニ適セリ。

羊

虎ハ、キハメテ、餓エタルトキニハ、鼠ノゴトキ、小サキモ
ノヲモ捕ヘ食ヘドモ、ツネニハ、牛、馬、鹿、羊ノゴトキ、ヤヤ、
大ナル獸類ヲ捕ヘ食フ。コレヲ捕フルニハ、物蔭ニカク
レキテ、ソノ來ルヲ待チ受ケ、猫ノ鼠ヲ捕フル時ノゴト

殺

ク、フイニ、トビカカリテ、ソノノドニ食ヒツク。カクテ、コ
レヲ、足ニテ、オサヘ、頸ヲフリナガラ、ソノ肉ヲサキ食フ
ナリ。サレバ、虎ノ頸ト足トハ、ソノ筋肉ト骨格ト、トモニ、
太ク、強クシテ、ヨク、牛、馬ノゴトキ、大ナルモノヲモ、口ニ
クハヘナガラ、走り去リ、鹿、羊ナドノゴトキハ、前足ノ一
打ニテ、殺スコトヲウトイフ。

虎ハ、カク、恐ロシキ猛獸ニシテ、マタ、人ヲモ捕ヘ食フコ
トアリ。インドニテハ、虎ノタメニ殺サルルモノ、年年、七
八百人ニオヨブトイフ。サレバ、インドノ人ハ、コノ害ヲ
ノゾカンガタメ、マタ、ソノ皮ヲエンガタメニ、種種、工夫

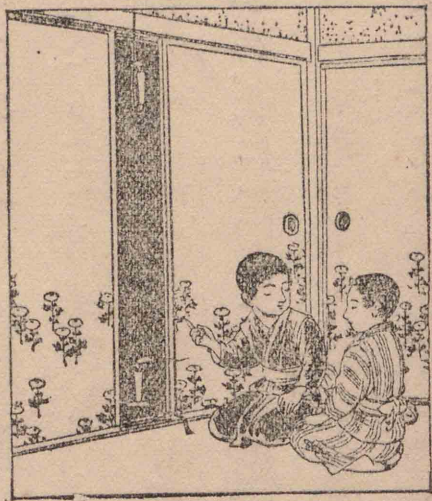
攻撃

ヲコラシテ、コレヲ狩ル。
サレド、虎ハ、性質伶俐ナルノミナラズ、マタ、前ニノベタルガゴトク、ソノ身體ノ構造、キハメテ、生活ニ適セルガユエニ、タクミニ、人ノ攻撃ヲマヌカレテ、今、ナホ、多ク、生存セリ。

第十九課 風

諸子、こころみに、家のうちの、あひ隣れる、大小の二室をえらびて、障子、ふすまをしめきり、その小室の内に、大いなる火鉢をすゑて、さかんに、火をおこし、その室の、じぶん、あたたまりたる時、大室と小室との間に、立てたる

傾坐 圖



焔は、かならず、大室の方へ、傾き、下に置ける蠟燭の焔は、かならず、小室の方へ、傾くべし。また、小室に、坐するものは、つめたき空氣の、大室の方より、入り來ることを感ずべし。

ふすまを、すこし、開きて、圖のごとく、鴨居に近き所と、敷居の上とに、火をともしたる蠟燭を置きて、しづかに、その焔の動く様を見よ。

きすれば、上に置ける蠟燭の

位置
説明

今、蠟燭の焰の位置の上下によりて、かく、傾きかたをこ
 とにするは、いかなる理由によるかを説明せん。
 すべて、空氣は、冷ゆれば、こく、重くなりて、下方へ、おり、暖
 まれば、うすく、軽くなりて、つねに、上方へのぼるものな
 り。しかして、空氣、暖まりて、上方へのぼるときは、他の、冷
 えたる空氣は、そのあとをうづめんとして、動き來るも
 のなり。
 かの、上に置きたる蠟燭の焰の、大室の方へ、傾くは、暖ま
 りたる空氣の、上にのぼりて、大室の方へ、動き出づるが
 ためにして、かの、下に置きたる蠟燭の焰の、小室の方へ、

方向

傾くは、大室の、冷えたる空氣の、小室の方へ、動き來るが
 ためなり。
 風は、ひつきよ、この理によりて、おこるものにして、地球上
 の、ある地方の空氣の、太陽の熱にて、暖まり、上にのぼり
 て、他の地方に、動き去り、他の地方の、冷えたる空氣の、そ
 のあとをうづめんがために、地球の表面を傳ひて、動き
 來るをいふなり。かくて、われらは、空氣の、地球の表面を
 傳ひて、動き來る方向によりて、北風、南風などと稱する
 なり。
 風は、時としては、暴風、颶風となりて、農作物を荒し、樹木、

不潔

垣根を倒し、屋根をまくり、船をくつがへすなど、われらに害をおよぼすことあれども、多くは、ほどよく吹きて、氣候をやはらげ、雨を運び來りて、植物の生育を助け、不潔なる空氣を吹きはらひ、道路洗濯物などのうるほへるを乾かし、帆前船を走らすなど、われらに利益を與ふることはなほだ、多し。

第二十課 天氣豫報と警報

生活

われわれは、空氣の中に、住んでゐるものであるから、空氣中の現象すなはち、晴れる、曇る、雨が降る、風が吹くといふよゝなことは、われわれの生活のうへに、非常に、關

氣象

調

係のあることである。したがって、それをまへもつて、知るといふことは、大いに、必要なことである。學問上では、空氣中の現象を氣象といふ。氣象臺や測候所はこの氣象を調べる所である。

電報

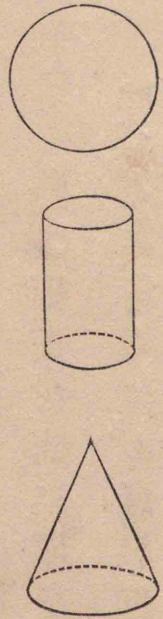
わが國では、東京に、中央氣象臺があり、各府縣に、すくなくとも、一箇所は、測候所がある。各府縣の測候所は、その地方の氣象を調べて、これを、日に、三度づつ、電報で、中央氣象臺に報告する。中央氣象臺は、東京地方の氣象を調べて、それと、各府縣から報告してきたものによつて、毎日、その日の午後六時から、その翌日の午後六時までの、

揭示

全國の氣象を考へて、これを電報で、各測候所に報知する。これを全國天氣豫報といふ。各測候所は、この全國天氣豫報によつて、その地方の氣象を考へ、また、中央氣象臺も、東京地方の氣象を考へて、これを報知する。これを地方天氣豫報といふ。全國天氣豫報や地方天氣豫報は、中央氣象臺測候所、または他の役所などの前に、揭示することになつてゐるので、われわれは、これを見て、あしたの仕事などを、まへもつて、きめることができるのである。また、中央氣象臺は、その調によつて、もし、ある地方に、暴風雨などが起りさうだ。」と思ふときには、すぐ、電報で、

掲

そのことを各府縣の測候所などに報知する。これを暴風警報といふ。この警報を受けると、その測候所や信號所では、すぐに、そのしるしを掲げる。このしるしは、警



報の種類によつて、いろいろ、あるが、おもに、晝

は、赤い球、圓筒形のもの、圓錐形のものなどを用ひ、夜は、紅燈、綠燈などを用ひることになつてゐる。

それで、沖へ、出ようとする船は、このしるしを見て、出ることを見合せ、また、航海してゐる船は、早く、港へは、いって、難を避けるのである。

避

げんに、この警報があることになってから、船のこはれたり、沈んだりすることが、たいそし、すくなくなったといふことである。

第二十一課 海國男子。

わが住む日本帝國の

四面は海に圍まれて、

いづくに、行くにも、棹楫を

借らで、進まん道あらず。

この海國に、生れたる

日本男子は、國のため、

覺悟

波路をおのが家として、

住まん覺悟を定むべし」

山なす、沖の大波も、

恐れず、進む勇氣こそ、

幼き時の練習に

よりて、えらるる身の寶」

泳の業も怠るな。

ぼしとの遊もこころみよ。

日本は海の國なるぞ。

海はわれらの家なるぞ。」

練習

第二十二課 ワガ國ノ海軍。

港 軍艦 任務 構造

ワガ海軍ハ、沿岸ノ海ノ防禦ノ上ヨリ、全國ノ海岸、海面ヲ四ツノ海軍區ニ分チ、海軍區ニ、一ツツツノ軍港ヲ置ケリ。軍港ニハ、オノオノ鎮守府アリテ、ソノ海軍區内ノ軍務ヲ取扱フ。ワガ、七十餘ノ軍艦ハ、オホムネ、分レテ、各鎮守府ニ屬セリ。軍艦ニハ、戰艦、巡洋艦、砲艦、通報艦ナドノ種類アリテ、オノオノ、ソノ任務ヲコトニシ、マタ、ソノ構造ヲコトニセリ。戰艦ハ、軍艦中、モットモ、優勢ナルモノニシテ、敵ノ軍艦、砲

厚 運送 速力

臺ヲ破壊スルヲ任務トス。サレバ、戰艦ニハ、イヅレモ、巨大ナル大砲ヲスエツケ、マタ、艦ノ外部ハ、キハメテ、厚キ鋼鐵ニテ包マレタリ。敷島、富士ナドハコレニ屬ス。巡洋艦ハ、軍艦中、モットモ、任務ノ多キモノニシテ、戰時ハ、敵ノ港灣、軍艦ノ情況ヲサグリ、アルヒハ、ワガ運送船、商船ヲ保護シ、アルヒハ、敵ノ運送船、商船、マタハ、コレヲ保護スル敵艦ヲ破壊捕獲シ、平時ハ、外國ニアル、ワガ國民ヲ保護シ、マタハ、近海ヲ警戒スルガタメニ、時時、巡航スルコトナドヲ任務トス。サレバ、巡洋艦ハ、イヅレモ、ソノ艦體大ニシテ、多量ノ石炭ヲ積ミ、ハヤキ速力ニテ、長時

河

命令

間、航海スルコトヲウルヨ一ニ造ラレタリ。淺間、八雲ナドハコレニ屬ス。

砲艦ハ、戰時ハ、島ノ間、大河、マタハ、淺海ナドニ進ミ入りテ、敵ノ軍艦、砲臺ヲ破壊シ、平時ハ、ワガ國沿岸ノ海ヲ警戒シ、マタ、外國ノ大河、淺海ニ沿ヘル地ニアル、ワガ國民ヲ保護スルヲ任務トス。サレバ、艦體輕ク、小サクシテ、船足、淺ク、造ラレタリ。筑紫、宇治ナドハコレニ屬ス。

通報艦ハ、敵ノ軍艦、マタハ、敵國沿海ノ地ノ防禦ノ情況ヲサグリテ、ワガ軍艦ニ通報シ、アルヒハ、ワガ軍艦ノ命令、通信ナドノ取次ヲナスヲ任務トス。サレバ、艦體、ハナ

ハダ、輕ク、速力、マタ、ハヤクシテ、通報ニ、便利ナルヨ一ニ、造ラレタリ。宮古、千早ナドハコレニ屬ス。

コノ他、海防艦、水雷母艦、驅逐艦ナドアリ。マタ、水雷艇トイフモノアリ。水雷艇ハ、形體、ハナハダ、小サクレドモ、速力、キハメテ、ハヤクシテ、雨、雪ナドノ降レル日、霧ノタテル日、マタハ、夜明、日暮、暗夜ナドニ乗ジ、魚形水雷ヲ發射シテ、敵ノ軍艦ヲ破壊スルモノナリ。

コレラ、各種類ノ軍艦ハ、前ニイヘルゴトク、オホムネ、分レテ、各鎮守府ニ屬シ、二隻以上ヲモツテ、艦隊ヲ組織シ、ソノ海軍區内ノ海上、沿岸ノ海ヲ巡航シテ、警備ノ任ニア

組織

タル。ナホ、コノホカニ、鎮守府ニ屬セズシテ、アルヒハ、戰時ノ演習ヲナシ、アルヒハ、時時、内國、外國ノ沿岸ノ海ヲ巡航シテ、航海、商業ヲ保護スルコトナドノ任ニアタル艦隊アリ。コレヲ常備艦隊トイフ。

をほり。

明治三十六年十一月廿四日印刷
 明治三十六年十一月十六日發行
 明治三十七年十月廿六日翻刻印刷
 明治三十七年十月廿九日翻刻發行

高等小學讀本三

定價金 八錢

著作權所有

著作兼
發行者

文 部 省

翻刻
發行者

細川芳之助
東京市京橋區銀座三丁目十番地

印刷者

大橋光吉
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所

合資博進社
東京市小石川區久堅町百八番地

明治三十三年七月十五日
 文部省檢査濟

發行所

東京市日本橋區新石衛門町拾六番地
日本書籍株式會社

